

チェルノブイリ原発事故をめぐる言説（2） グードルン・パウゼヴァング『みえない雲』を読む

安 元 隆 子

Takako YASUMOTO. A study on “The cloud” by Gudrn Pausewang. *Studies in International Relations* Vol. 35, No. 1. October 2014. pp. 17 – 28.

In 1987, the next year after the Chernobul nuclear power plant disaster, “The cloud” by Gudrn Pausewang was published. We can find the influence of the Chernobul nuclear accident in this novel. This novel created a great sensation and reinforced in the Antinuclear movement in Germany. After publication, it was made into a film and a comic. However, they did not depict the last scene of the novel in either. Importance of last scene : Depicts author’s idea shows the protagonist’s rebirth of spirit after radiation sickness, and the importance of solidarity, action and the verbal battle for the anti- nuclear movement

However, it was cut from both the film and comic book depictions as too controversial, and the story was made into a popular love story

【1】はじめに

2011年3月11日の東北大震災に伴い発生した福島第一原発事故は、広島、長崎、第5福竜丸に続き、4度目の大きな核被害を日本にもたらした。

「核の平和利用」を信じてきた我々に、被曝地「福島」の現実の重くのしかかる。これを機に沸騰している「原発」についての論議は、28年前に起きたチェルノブイリ原発事故¹が引き合いに出される事が多い。では、人類史上最悪の原発事故と言われたチェルノブイリ原発事故を人類はこれまでどのようにみつめ、文学にしてきたのだろうか。そして、それらを検証することは、未曾有の原発事故被害に直面した我々に行くべき道への指針を与えてくれるのではないか。本論はこのような意図に基づいた、「チェルノブイリ原発事故を描いた文学研究」の一環であり、「チェルノブイリ原発事故をめぐる言説（1）スベトラナ・アレクシェービッチ『チェルノブイリの祈り』を読む」²に続く論考である。

チェルノブイリ原発事故の翌年、1987年に刊行されたドイツのグードルン・パウゼヴァング

（Gudrun Pausewang）³の小説 *Die Wolke*（『雲』）は、1988年に「ドイツ・サイエンス・フィクション賞」、「ドイツ青少年文学賞」を受賞した。日本語翻訳者の高田ゆみ子氏によれば、この本は、親子2代に読み継がれ、14版、150万部以上のベストセラーとなっている。また、ドイツをはじめヨーロッパの学校教育でもディベートの教材として取り上げられるなど、原発の是非とは別に、真摯に核エネルギーに向き合うための格好の教材となり、結果として、脱原発の世論形成に影響を与えたという⁴。

日本では、先に挙げた高田氏の翻訳で、1987年に小学館より『見えない雲』初版が、2006年に小学館文庫『みえない雲』が刊行された。そして、2011年の福島原発事故後、再度注目が集まり重版されたがしばらくは品切れの状態が続き、日本でも原発について考察する際の指針として多くの人々がこの本を求めていることがわかる。

また、この小説は2006年に映画化⁵、2008年には漫画化されているが⁶、両者とも視覚的表現により、文学作品では味わえない解りやすさや臨場感を付与することには成功しているものの、原作の中枢を成す登場人物の造形描写と、最も重要と

思われる小説末尾の場面が省略されていることは、この小説の根幹を揺るがすものと論者は考える。よって、本論ではまず小説の表現に即して、その世界を再検証していく⁷。

【Ⅱ】「ヒバクシャ」差別と偏見の描写、及び「ヒバクシャ」の持つ意味について

この小説は16の章から成り立っていて、ストーリーは以下のようだ。

ドイツの原子力発電所・グラーフエンハインフェルトで爆発事故が発生し、未だ聞いたことのない非常事態警報に人々はパニックに陥る。14歳の少女・ヤンナーベルタは、外出中の両親に代わり、小さな弟・ウリを連れ、放射能汚染が迫る中、自転車で避難する。しかし、途中で弟は事故死し、通りかかった家族に助けられたヤンナーベルタも放射能を帯びた雨を浴び、被曝してしまう。気がつく救助され、救急病院に収容されているが、入院中に両親と祖母、そしてもう一人の幼い弟の死が判明する。入院中の子どもたちを次々と死が襲い彼女にも被曝症状が現れる。しかし、ヤンナーベルタと同じように被曝しながらも、被曝者のために希望の家の建設を志す母方の叔母・アルムートらと活動を共にする中で、「生きる」事に目覚めたヤンナーベルタは、心の決着をつけるべく事故現場に赴き、放置されたままになっている弟・ウリの遺体を埋め、その後、久しぶりに家に戻る。そこで原発事故の時には海外にいて何も詳しいことを知らされないまま帰宅した父方の祖父母と再会する。「政治談議」を嫌い、騒ぎすぎだ、と原発事故の情報開示を批判する彼らに対し、帽子をとり、被曝し脱毛した頭部を曝して語り始めるヤンナの姿をクローズアップして、物語は終わる。

このように、ドイツ南部に実在するグラーフエンハインフェルト原発における架空の事故を描いた物語であるが、この背景に、本著刊行前年に起きた旧ソ連邦のチェルノブイリ原子力発電事故の体験があったことは、警報を聞き避難する人々が口にする「スーパーガウ」⁸ということばをヤンナが耳にした時の、次の箇所からも明らかだ。

スーパーガウ？ヤンナーベルタは思い出した。

ずっと前のことだったが、ソ連の原子力発電所で事故があったとき、みんなガウということばを口にしていた。それも何週間ものあいだ、いろんなところで聞かされた。(p.11)

1986年4月26日に起きたチェルノブイリ原発事故。チェルノブイリ原発自体は現在のウクライナ共和国に存在するが、事故後の風向きにより、隣のベラルーシ共和国に多大な被害を及ぼし、放射性物質を含んだ雲がヨーロッパを始め北半球全体に流れ、日本にまで飛来したことは周知の事実であろう。このチェルノブイリ原発事故が、ドイツをはじめヨーロッパの国々を大きな不安に陥れたことは想像に難くない。この物語の中にも当然のように、放射能に侵された子どもたちの髪が抜け、次々と病室の仲間たちが亡くなってゆく放射能被害の恐ろしさが描かれている。しかし、同じくチェルノブイリ原発事故を題材にしたベラルーシの作家、スベトラナ・アレクシェービッチ『チェルノブイリの祈り』⁹に比べ、直接的な身体症状への変化の描写は少ない。だが、被曝者に対する差別と偏見については『チェルノブイリの祈り』と同じように描写されている。例えば、

- ① 「(略)すると、あなた—放射能をかぶってしまったの?」「そうかもしれません」ヤンナーベルタは無気力に答えた。そのとたんドアが閉まった。(略)「水をあげるわけにはいかないわ。だって、あちらから来る人はみんな放射能にさらされてるってことでしょ」(p.89)
- ② この夏の真っ盛りに帽子やスカーフをかぶっているのは被曝者しかいない。被曝者らしき人を見ると、まるで波が引くようにみんな遠ざかっていく。そして離れたところから好奇の視線を投げるのだ。軽蔑したり、意地悪をしたり、心を傷つけるようなことを言う人はだれもいない。かといって、学校でもバスの中でも、ヤンナーベルタの隣に座ろうとする者もいなかった。彼女はそのことにすぐに気づいた。(p.154)
- ③ 「息子のガールフレンドがよりにもよってフルダの娘でね。フルダなら間違いなく放射能にやられているはずなんだ」(略)「(略)

しかしこの先どんな遺伝障害が出てくるかはわかったもんじゃない。(略) 口を酸っぱくして息子に言うんだが、相手にしないんだよ」(p.230)

というように。背景には放射能障害が他者にうつるといった「放射能」に対する人々の誤った認識がある。しかし、その半面、放射能が人体に及ぼす悪影響、つまり、原発と原爆とは同じ核エネルギーを用いており、放射能は人間の遺伝子を傷つけ、被曝者だけでなくその子孫にまで悪影響を及ぼす可能性がある、という「ヒバク」の言葉の真の意味を理解している点に注目すべきである。

- ① どんな恐ろしいことが起きるというのだろうか—ヤンナーベルタは想像してみた。彼女はいつだったか広島原爆の絵を見たことがあった。広島では放射能のせいで髪の毛が抜けた人や、出血や化膿、吐き気で苦しんだり白血病にかかったりして死んだ人がたくさんいたという。恐ろしいことばかりだ。なかでもヤンナーベルタがぞっとしたのは髪の毛が抜け落ちてしまうということだった。頭がはげて、好奇と憐みの視線にさらされるなんて、耐えられそうにない。(p.55)
- ② 「ヒバクシャ？」 ヤンナーベルタはそれが広島原爆での生存者をさし、今やグラーフエンハインフェルトを生きのびた人々をも意味するのだということを初めて知った。(p.153-154)

このように、広島とグラーフエンハインフェルトの核被害者が同等の位置に置かれていることは見逃せない。日本は、広島、長崎への原爆投下という、人類初めての核兵器被害を受けたのにもかかわらず、戦後、「核の平和利用」という言葉を信じ、原子力発電所が多数設置された。そして、2011年、福島第一原子力発電所の事故が起こった。この事故が未だ収束せず、まだ多くの方々が仮設住宅に暮さざるを得ない状況に置かれていることは言うまでもない。しかし、原爆と原発事故が同じ核エネルギーを用いたものであり、その被害がどのように及ぶものなのか、両者を結んで考える日本人はそれほど多くはない。だが、この『みえない雲』

に於いてはヤンナーベルタという少女を介して、最も重要なこの事実が再確認されているのである。

【Ⅲ】対照的・類型的な登場人物の造型

1. 「父方の祖父母」と「父と母」

さて、このような「核」に対する認識の下、グードルン・パウゼヴァングが物語の中に登場させたのは、対照的、類型的な人物たちである。まず、ヤンナーベルタの父方の祖父母をみてみよう。

- ① チェルノブイリ事故のあと、ヤンナーベルタは度々両親と一緒にデモに参加したことをよく覚えている。あの時は両親と祖父母とのあいだで大げんかがあった。祖母のベルタと祖父のハンス・ゲオルグは、今や、もう原子力なしにはやっていけないと主張した。原子力は車やテレビと同じように現代生活の一部なんだ、チェルノブイリのような事故はドイツの原発では起こりえない、というのが彼らの意見だった。二人は、デモで何かを動かすことなんてできないし、デモなんて夢想家と過激派のお祭りのようなものだと言っていた。(P.13)
- ② 「どんなことがあっても自分を見失ってはいかん」というのが祖父ハンス・ゲオルグの口癖で、祖父は人前で涙を見せることさえ嫌っていた。でも父は祖父の理想どおりにはならなかった。ヤンナーベルタは父が泣くのを度々見たことがあった。一度は、ウリが重い病気で入院していたときで、助かる望みはほとんどないと言う医師のことに父は泣きだした。そして、もう一度はある集会でのことだった。チェルノブイリの事故のあと、両親は度々かけて集会の準備に奔走していた。その集会では「我々の原発はどこまで安全か」というテーマで、各政党の代表者と市民たちのあいだで討論が行われる予定になっていた。ところが直前になって、一人を除く政治家の全員が出席を断ってきたのだ。そのとき、平静を失った父は泣き出してしまった。しかし、その場を救ったのは母だった。母は演壇に駆け

あがると政治家の欠席通知を読み上げ、そのあと集会を市民どうしでの話し合いに変更した。(p.137-138)

国家を盲信し、保守的で厳格なこのような父方の祖父母に対し、ヤンナーベルタの父は、ある意味、気弱で優しく感情豊かな人間として描かれる。しかし、彼は妻（ヤンナーベルタの母）と共に「連帯の力」によって社会変革を目指す人物でもある。

ヤンナーベルタの両親は当時、原子力利用に反対する市民運動グループの結成メンバーだった。でもときの過ぎるうちに、チェルノブイリのことはほとんど忘れ去られてしまった。西ドイツの原子力発電所は特に大きな事故もなくそのまま操業を続け、市民グループの運動はいつの間にか活気を失ってしまっていた。いつだったか父がこんなことを言っていた。「チェルノブイリだけでは十分じゃないってことだよ。自分の国で何かが起こらなきゃ、みんなのお尻に火がつかないんだ」(p.14)

このように、人々に貴重な警告を発する父であるが、その父をさらにリードしているかのようなヤンナーベルタの母は次のように描かれている。

① ヤンナーベルタは一生懸命に記憶をたどった。チェルノブイリの事故のあと、母は万一放射能の事故が起きた場合どんな対策を立てているのかと、いくつもの市町村の役場に電話で問い合わせたことがあった。確かどの街も、放射能汚染患者を受け入れる用意がないと答えていた。避難所もなければ市民病院にも設備がないという理由からだ。母はさらに災害対策案の内容を見せてほしいと頼んだが、それは公表するものではないからと拒否された。母も父もとても腹を立てていた。(p.94)

② ヤンナーベルタは以前、ビブリスで行われたデモのことを思い出さずにはいられなかった。地元の人たちは頬づえをつきながら、開け放った窓ごしにデモの悪口を言っていた。そんな人たちに向かって母は大声で言った。「もしあなたがた自身の命が脅かされるようなことが起きても—それでも

そうやって窓ぎわに寝っころがってようってわけ？」(p.55)

こうした描写から明らかなように、ヤンナーベルタの母はチェルノブイリ原発事故後、いち早くその再来を危惧して対策を確認しようとし、また、その危険性を訴え、自ら行動して社会の変革を全うしようとする、想像力と行動力に富んだ意志の強い女性として描かれている。事故が起きれば、その被害は自分たちだけでなく、次代に被害が及び、子どもたちがゆえなき苦しみを最も味わう存在であることを十分に理解し、デモの垂れ幕にそのことを意味する詩を書いたりしている¹⁰。

では、このような強い精神力と行動力を持った母を生み育てた、母方の祖母はどのように描かれているのだろうか。

2. 「母方の祖母・ヨー」と「父方の祖母・ベルタ」

母方の祖母は「ヨー」といい、看護師で、週末は一週間おきにデモに参加し、「何かを変えなくちゃいけない」というのが口癖である。そして、

ヨーはいつも素敵なウイキョウの匂いがした。縮れ毛に少し白髪がまじっていて、真ん中から髪をわけていた。青い目、上唇の上のうぶ毛、顎のえくぼ—カイはヨーからこれらを受けついでいた。ヨーは三年か四年ごとに引っ越しをして、そのたびに「旅に出るときは荷物を軽くしたいのよ」と言いながら「がらくた」を勢いよく捨てるのだ。(p.132-133)

とあるように、過去や物質に拘泥することなく、現在の自分自身だけを生きる原点に据えた、先進的で意志的、行動力に富んだ人物として描かれる。

しかし、引っ越しのたびに、「がらくた」と一緒にたくさんの写真がゴミのコンテナに放り込まれる中、何度住まいを変えても決して捨てられることのない、居間に飾られている手垢のついた額に入った写真があり、その写真は戦争の終わる直前に十八歳で戦死した水兵、ヨーの恋人であったことが読者に知らされる。

戦争が終わって数年後、ヨーはカール・ヨーストという人と結婚して女の子を生んだ。ヤンナーベルタの母である。しかしヨーはその夫とは離婚した。死んだ彼が忘れられなかつ

たのだ。(略) ヨーが離婚してかなりの年月が過ぎ、三十五のときに彼女はもう一人子どもを生んだ。(略) 子どもの父親についてヨーは何も語らなかったが、あるときヤンナーベルタはアルムートに父親のことをたずねたことがあった。(略) 「父親がだれかって? 写真の水兵さんに決まってるじゃない」(p.133-134) このように、二人目の子どもはシングルマザーとして生み育てることを決意し、実行している。その子どもであるアルムートさえも自分の父親についての詮議に意義を認めず、戦死した水兵を慕っているかのようだ。ヨーは、父と母と子どもたち、というこれまでの典型的な家族像に捉われることなく、情熱的な恋をし、世間の常識にとらわれない新しい家族を作った。

では、一方の父方の祖母はどうであろう。

父方の祖母、ヤンナは典型的なおばあちゃんとして造形されている。彼女は、善は必ず勝ち悪は必ず打ち負かされると考え、秩序を重んじる。「緑の人々」¹¹のことをたんに礼儀知らずな連中とみなし、彼女にとっての最上の世界はワッフルを焼くことであった。そして、

叱られるのはヤンナーベルタが大人の話に加わろうとしたときだった。十四歳で政治の話をするのはまだ早いというのが祖母の持論(p.17)

なのである。家事をよくし、家庭的であるが、政治は政治家に任せ、子どもは子どもらしく、をモットーとするような保守的な人物である。こうした祖母ベルタは砲兵隊の大尉だった祖父に匹敵し、婦人隊(ナチの婦人組織)にいて、結構高い地位にあったとも書かれている。(p.163)

3. 「叔母・ヘルガ」と「叔母・アルムート」

次に、ヤンナーベルタの二人の叔母について検証したい。父方の叔母・ヘルガは以下のように描写されている。

- ① ヘルガ叔母のところへはどうしても行きたくなかった。(略) いつもみんなの模範でありたいと考えているような、あの伯母(p.115)
- ② まるで自己抑制の見本のようだ。(p.137)

ヘルガは更に、「地味な服」を着、「クラシック音楽」を愛好する「数学と化学の教師」であり、「行儀や立ちふるまい、教養などに関してとても口うるさい」人で、「何事にもきっちりしないと気がすまない性質だった」(p.152)とある。ヘルガは、かなりステレオタイプの硬くて融通の利かない教師として描かれる。こうした人間性は、ヤンナーベルタの人間性と拮抗するものであり、特にそれが顕著なのが、「被曝」という現実への対応のあり方である。

前述したように、ヤンナーベルタは被曝したことにより、頭部の髪の毛が抜け落ちてしまう。その頭部を人目にさらすことは、原発事故の悲惨さを人々に想起させ、心の平安を乱すことであるから隠すべきなのか、それとも苛酷な現実を忘れることなく人々に想起させるために人目にさらすべきなのか。こうした二人の葛藤を描いているのは次の部分である。

- ① 最後に彼女は、ヤンナーベルタに帽子をかぶるようにと言った。「少なくとも外出するときはそうしたほうがいいと思うわ。それとも、わざと人を驚かせたいの?」「私は隠すものなんてないわ。私はハゲ頭だけどここれが現実。このままでいるつもりよ」(p.139)
- ② ヘルガは車に乗るとすぐ、ヤンナーベルタに黒い帽子を渡した。(略) ヤンナーベルタは帽子を受け取ると後ろの座席に置いた。それを見たヘルガは眉間にシワを寄せて言った。「私ならかぶるけれど。汚染地域から来た人を見ると、みんなおかしい反応をするのよ。それに、避難してきた人を泊めないホテルだってあるの。もしも病状がはっきりと目に見えたら、お客が逃げていくからって言うのよ」ヤンナーベルタは強い口調で言った。「気持ちはわかるわ。だれだって、思い出したくないものね」「もう一度言うけど、私だったら帽子をかぶるわ」「私は覚えていきたいの」(p.147)

同様に、ショックを与えないために「真実」を隠すのか、それともショックを与えても「真実」を告げるべき、と考えるのか。次はヘルガのことば。

「ええ、私は嘘をついてるわ。でも、それが最善の方法だと思っているからよ」(p.162)

この点でも、両者の選択は真逆である。このようなヘルガは、政治は政治家に任せ我々が関与すべきではない、と考える父方の祖母・ベルタと同じ範疇に属する人間であると言えよう。「ヘルガは政治的な出来事は決して話題にしなかった」(p.165)からである。

一方の母方の叔母・アルムートは、バートキッシンゲンに住み、ハンメルブルグで教員として働いていたが、生徒たちの避難を優先したために被曝し、おなかの赤ちゃんを中絶せざるを得なかった女性である。しかし、彼女は被曝した「みんなの出会いの場」「希望と勇気を与えるような場所」を作ることを目指して活動する。

「私たちも組織を作るの。被曝者以外の人たちも賛同してくれているし、きっと何かを動かせるわ」「チェルノブイリのあとのデモのこと、まだ覚えてる？」ヤンナーベルタは言った。「みんな一生懸命だったじゃない、ママもパパもあなたも。私はまだ小さかったけど、よくわかった。でもおじいちゃんたちが言ったことは正しかった。そのうち、みんなチェルノブイリのことなんてきれいさっぱり忘れてしまう、ウクライナでたくさんの人たちが死んでいこうとも、現実は何も変わらないって。でもなんとかしなきゃってパパとママは言ってたわ」「チェルノブイリだけじゃこたえなかったのよ。でも、今回の事故でさえ、どれほどのクスリになるかわからないわ。もっと大きな事故が起こらないとみんな気づかないのかもしれない」「そうね。今度のことだってもう、みんな忘れようとしているもの。だから私、カツラも帽子もかぶりたくないんだ」(p.179-180)

このように、父と母、そして、叔母・アルムートは志を同じくし、連帯し、行動することで社会変革を目指すタイプとして描かれ、父方の叔母・ヘルガとは同じ教員でありながら、全く対照的な存在として描かれている。

なお、先に引用した父の言葉「チェルノブイリだけでは十分じゃないってことだよ。自分の国で

何かが起こらなきゃ、みんなのお尻に火がつかないんだ」(p.14)と重なるようにアルムートが人々に注意を喚起する言葉「チェルノブイリだけじゃこたえなかったのよ。でも、今回の事故でさえ、どれほどのクスリになるかわからないわ。もっと大きな事故が起こらないとみんな気づかないのかもしれない」は、作者グードルン・パウゼヴァングが読者に訴える強いメッセージであることは間違いない¹²。現代に於いてもこの言葉の持つ意味は大きい。特に、チェルノブイリ原発事故の後も、危機感を募らせることなく原発を増設し、稼働させてきた日本にとっては。福島原発事故後、やっと人々は「お尻に火がつ」き、核エネルギーの問題点を再認識して原発の再稼働に反対する世論が強まっているが、政府は再稼働の方針を打ち出していることは周知の事実であろう。「のど元過ぎれば熱さ忘れる」人々。その目を「事実」に注ぐべく、ヤンナーベルタは髪を抜けた頭部を曝すのである。

4. 主人公・ヤンナーベルタ

こうした大人たちに囲まれた主人公、14歳のヤンナーベルタはどのように描かれているのだろうか。

またフロリアンの父が言った。「ヤツに聞いてやる。良心に恥じないのかって」(略)なぜ、フロリアンの父は何も言わないのだろうか？ヤンナーベルタは石の人形を持った手をあげた。それと同時にドアがパタンと閉まった。石の人形はドアにあたってハラハラになり、床の上に落ちた。(略)「彼女は勇気があるわ」フロリアンの母親は夫に言った。それを聞いたアイゼは言った。「勇気じゃない。怒りよ。」(p.100-104)

これは、入院中に政治家が病院を視察に来た際の出来事である。政治家の責任を追及する発言をしていた大人たちは、いざその政治家が目の前に現れると何も言葉を発することが出来ない。それに対し、ヤンナーベルタは責任を取らない政治家にたった一人、怒りの感情を爆発させる。

こうした激しさを内に秘めたヤンナーベルタは、同時に「私は覚えていきたいの」「だって私には、隠

すものなんて何もないもの」という言葉を繰り返す。そして、その言葉を行為に移せば、かつらや帽子の装着の拒否に至り、「今度のことだってもう、みんな忘れようとしているもの。だから私、カツラも帽子もかぶりたくないんだ」という信念が生まれるのである。

彼女は、大人に対しても動じることなく自己を屹立させていく。例えばそれは、フリーメル夫妻に「おじさんたちは原子力に賛成だった？それとも反対だった？」(p.167)「じゃチェルノブイリで事故があったときは？」(p.168)という質問を投げかけることにも通じていく。大人から見ればなんとも、かわいげのない、また、扱いにくいところのある少女ということになるだろうが、こうした要素を見逃してはならず、また、このような要素が伏線となり、物語末尾の場面に通じていることに注意しなければならない。

では、このようなヤンナーベルタの性格はどのようにして形成されたのだろうか。

ヤンナーベルタは演壇わきの階段に腰をおろして、そのようすを見ていた。彼女には話し合いの内容までは理解できなかった。でもみんながいかに怒りと不安におののいているかは感じとることができた。会場にはタバコの煙がもうもうとたちこめていたが、話し合いのようすはとてもエキサイティングだった。(p.138)

これは父母が市民に呼び掛け、討論会を行っている時の様子である。幼い彼女は深い意味は分からなくとも、こうした立ち上がる市民の熱気に接して成長して来た。父母、母方の祖母と叔母、このような人間関係が彼女の精神に与えた影響がこの物語の原動力となっている。

【IV】母系の物語、女の物語

以上、表現を具体的に追い、登場する主要人物の造形について振り返ってみたが、ここで再度整理すると次のようになるだろう。

すなわち、この小説は対照的・類型的な登場人物造形によって成り立っている。そして、「母系中心」物語である。自由な精神を持ち、しがらみを

断って生きる祖母のヨー、母、そして叔母。主人公のヤンナーベルタは彼女たちの精神を受け継いでいる。もちろん、父も母と同じ思想を持ち、活動をしているが、父母の過去の活動を振り返る時のみ登場するのであって、それも前述したように母の方がいざという時強い精神力を発揮し、行動的である。父は母と比べるとどちらかと言えば影が薄い。

そして、これは「女」の物語である。この物語における敵役の必要性ゆえであろうか。父方の祖父は最後まで登場するが、母方の祖母ヨーの初めの恋人は戦死し、二番目の男性とは離婚し、三番目の男性については詳しく明かされず、シングルマザーの道を選んでいる。そして、母と比べると父の存在感は薄く、ヤンナーベルタの幼い弟は両親と共に亡くなり、カイも避難中に事故死を遂げていることは既に述べた通りだ。そして、原発事故後再会した同級生のエルマーは、「目を開けていさえすれば、はっきり見えるよ！」(p.184)「(新聞を)読まなきゃ駄目じゃないか」(p.185)と、ヤンナーベルタに現実を直視することを教えるが、彼も被曝をしており、その事実を直視した結果、絶望感から逃れることが出来なかったのであろう。エルマーは自殺する。こうして見ると、物語に登場する主要な人物は女性なのである。もちろん、母方の叔母・アルムートの夫であるラインハルトは妻と共に被曝者支援に奔走し、その父・バプスも協力者として登場するが、この二名を除いては男性は夭折するか、影の薄い存在であると言えるだろう。アルムートの友人で被曝のために亡くなった女性の存在が明らかになるが、彼女はシングルマザーであり、その夫の存在は明らかにされていない。しかし、その母親(「おばあさん」として登場)はアルムートらと行動を共にすることになり、彼女の存在はヤンナーベルタにも影響を与えることになる(この母親の夫についても触れられていない)。このような事実は女性中心小説である、という見解を裏付けるだろう。そして、こうした構造から、作者、グードルン・パウゼヴァングがこれまでの男性中心の社会とその価値観に対して限界を感じ、新しい社会と価値観を求めている、という見方もできるように思う。

ただ、登場する母方の女性たちがすべて「善」として描かれているかと言えば、そうではない。というのも、ヤンナーベルタにとっては痛恨の出来事である弟・カイの死についてであるが、避難が遅れたのは、「地下室へ行って戸と窓を全部閉めなさい」というアルムートの電話があったからである。しかし、家からの脱出を促したのは母からの電話の言葉「地下室はだめ。危険よ！放射能はどこにでも侵入してくるの。できるだけ早く逃げなさい。」である。だが、外に脱出、避難の途上でカイは死亡した。母と叔母、この二人の女性は最終的にカイに死をもたらしことになる。こうした両者の存在の意味を確かめるように、ヤンナーベルタは「あのときなぜウリに地下室にいなさいって言ったの？」と聞いている。そして、アルムートは後悔にさいなまれながらこう答える。「私が状況をしっかりつかんでさえいたら—」と。しかし、ヤンナーベルタはこうも付け加えている。「逃げずに残っていたらウリは死ななかったかもしれないわ」。この言葉から、母の指示も有効ではなかったと思っていることがわかるだろう。つまり、弟・カイの死についてはこの物語の強力な女性登場人物である母と叔母、二人ともにカイを死に至らしめたという負のイメージをも帯びた存在としてあるのである。

【V】ヤンナーベルタを変えたもの

弟のウリの死、両親と祖母、もう一人の弟の死、病院で次々と亡くなっていく子どもたち、エルマーの死。ヤンナーベルタは数えきれない人々の死を体験する。そして、自分自身も死の影に怯える。しかし、叔母・アルムートとその夫・ラインハルトとその父、そして、アルムートの友人の子どもたちとその祖母らとの共同生活を通して、被曝した人々のための希望の家を作ろうとする。その活動を通して、ヤンナーベルタは今、こうして生きていることを自覚し、生命の尊さを再認識させられたのである。「学校へも行かないで将来どうするつもりなの？」という父方の叔母・ヘルガの言葉に対し、彼女はこう答えている。

「将来ですって？私に未来があるかどうかはわ

からないわ。でも、命が少しでも残されてるなら私は生きたいように生きる。あなたは学校よりほかに大切なものはないと思ってるのね」「じゃあ、学校より大切なものっていったい何なの？」「生きてるってということよ」(略)「ああ生きているんだなと実感できるってこと」(p.208-209)

この部分から「生きる」という感覚がヤンナーベルタの中に醸成されたことがわかるだろう。この精神的な覚醒の身体的発現が、脱毛してしまった頭部に再び髪が戻ってきたことである。

「生えてる！また髪が生えてきたんだわ！」彼女はうれしさのあまり、部屋中を跳びはねた。(p.213)

こうした彼女の心身の変化はフランスの反原発運動を支援しにドイツ人がフランス国境へ向かう際、元隣人が語った「あなた変ったわ。このあいだまでは、まだほんの子どもだったのに」(p.222)という言葉からも明らかになる。

このような変化をヤンナーベルタにもたらしした人々については先に述べた通りだが、その人々が形成したものが、「血縁を超えた家族」であることには注意すべきである。アルムートとラインハルトは実の夫婦であるが、二人にとっての初めての子どもは被曝により中絶せざるを得なかった。しかし、友人の子どもとその祖母を引き取り、ラインハルトの父を含めて「血縁を超えた家族」を形成し、前進しようとしているのである。母系そして女性中心の登場人物に、これまでの男性原理に基づく社会や価値観からの脱却が読みとれたように、「血縁」を超えたところに成立する家族に新たな可能性を見出そうとする作者、グードルン・パウゼヴァングの思いが読みとれる。

「山も谷も子どもたちで埋まって、その向こうに大人たちが地平線まで続いている」バプスは言った。おばあさんも眼鏡をずりあげながら口を開いた。「未来があることを忘れてはだめね。未来はずーっと雲の向こうまで続いているのだから」(p.228)

このように、ヤンナーベルタは「血縁を超えた家族」から、人類の「生命」の継承と、「未来」を担う使命を学んだのではなかったか。

こうした変化を遂げたヤンナーベルタの精神は、次の場面からも読みとれよう。過去の出来事から一歩前進するためのけじめとして、ヤンナーベルタは菜の花畑に放置されたままになっているはずのウリの遺体を埋葬するため、事故現場に一人赴く。その途上で彼女を車に乗せてくれた女性がいた。彼女はヤンナーベルタと同じように被曝した自分の妹の苦労話を始めた。

「ほんとうに何から何までなくしてしまったのよ！」そう言って彼女はため息をついた。
「でも生きているのでしょうか？」ヤンナーベルタは言ったが、彼女はそれにも耳を貸さず、一人で話し続けた。(p.241)

苛酷な被曝の現実打ちのめされ、しかし、そこに留まり続けるこの女性にヤンナーベルタが掛けた言葉は「でも生きているのでしょうか？」である。「生命」があることに感謝し、「生命」こそあれば、そこに希望が宿ることを、ヤンナーベルタはこれまでの体験から知ったのである。こうした変貌が必然的に小説の最後の場面を生み出す。

【VI】祖父母との再会

実家に戻ったヤンナーベルタは、事故当時海外に出ていて、また、ヘルガの「知らせない方がよい時もある」という考えにより事故の詳細を知らされずに帰宅した父方の父母と再会する。その場面は次のように描かれている。

「それにしても、その原発がそんなに危険だとはい予知できなかったのかしら？」祖父も何か言おうとしたが、ヤンナーベルタは我慢できずに言った。「パパとママがあれほど言っていたじゃない？」彼女は身を乗り出して祖母の答えを待った。すると祖父が口を開いた。「私が思うには―」祖母がさえぎった。「やめましょう、あなた、まずコーヒーにしましょう。それから政治談議をすればいいわ」「政治談議―祖母がよく使っていたことばだった。祖母にとって政治は、サッカーや切手集め、クロスワードパズルなど、毒にも薬にもならないくだらない趣味と同列で、彼女は少々軽蔑をこめて言うのだった。この「政治談議」

ということばは、いつも両親を激怒させた。(p.258)

「政治」は専門家に任せていればそれでよい、という考えの祖母。この祖母には、政治家を選ぶのは我々民衆であり、我々民衆が政治を動かしているという認識が全く見当たらない。では、祖父はどうか。

- ① 祖父は言った。「なんともでも言えるさ。しかし、チェルノブイリのときにみんながどれほどヒステリックになったか思い出してみなさい。今回も同じだ。原発反対論者にとっては事故がどんなに大きくても大きすぎることはないんだ。それに社会改良論者や緑の連中。あいつらは我々を石器時代へ戻そうとしているんだ」(p.262)
- ② 祖父はあたかも聴衆の前で演説するかのようには話し出した。「知らせなくてもいいことまでマスコミに知らせたのがそもそもの間違いだった。連中はなんでも大げさに書きたてる。そんなことさえしなければ、こんなヒステリーが生じることもないし、誇張やプロパガンダにまどわされることもなかった。そこらのおばあさんたちが、原子炉の内側のことやレムダのベクレルだのについて知る必要がどこにある？ 結局はなんにもわかりっこないんだ。それに世界中に死者の数を言いふらして何になる？ 今回のことで、また西ドイツの評判はガタ落ちだ。昔なら、こんな大騒ぎになる前に物事を処理できた立派な政治家がいたものだ。今回も政治家たちが内密にしてさえすれば、きっとシュリッツでも事故のことなんか全く気づかないですんだに違いないし、鼻を突っ込むマスコミの連中もいなかっただろうに」祖母は聞きながら、横でうなずいていた。ひとしきり話し終えると、祖父はひと息ついた。(p.263)

このように祖父は盲目的に「核の平和利用」を信じ、利便性だけを優先し、原発を容認している。そして、民衆が「ヒステリー」を起こしているとして、その存在意義を認めていない。また、「情報公開」を完全に否定し、政治家が内密にコントロー

ルすることで世の中はうまくいくと信じている。最後に登場したこのような祖父母が体現する思想と、ヤンナーベルタはどのように対峙するのだろうか。その様子は次のようだ。

ヤンナーベルタはゆっくりと帽子を取った。
そして祖父母をまっすぐに見すえると、あの
日からのことを話し始めた。(p.263-264)

このラストシーンからは、ヤンナーベルタの強い意志が読みとれる。この時かぶっていた帽子はアルムートらと共同生活をするおばあさんが寒さを心配して彼女に編んでくれたものである。ヘルガ叔母がどんなに帽子をかぶってと懇願しても、ヤンナーベルタは応じなかった。けれど、自分の歩むべき道を見つけ、精神的に成長を遂げた彼女は今、帽子をかぶっている。皆にこの現実を忘れさせないように、脱毛した頭部を露出させることにこだわりがなくなっていることを示している。人の思いやりを素直に受けることが出来るようになっていたのだ。そして、かぶっていたおばあさんの編んでくれた帽子を脱いだヤンナーベルタは、祖父母をまっすぐに見つめ、原発事故のあった日からのことを話し出す。ここには連帯の力によって社会変革を目指す人々と、祖父母に代表される反動的で保守的な社会勢力との対決が暗示されていることが容易に読みとれる。と同時に、その対決から成長したヤンナーベルタの姿を読みとるべきであろう。それは彼女が被曝後、入院した病院に政治家が視察に訪れた時の場面と比較すれば明らかである。

かつて彼女は、何も責任を取ろうとしない政治家が去ったドアに向かって石の人形を投げつけた。あの時は意気地のない大人たちに比べ「勇気」のある行動ともみなされたが、それは「怒り」の「感情」をぶつけたにすぎなかったのである。しかし、今は「感情」をぶつけるのではなく、「言葉」をもって説得しようとしている。ここには、被曝、さまざまな人々の死、そして自らの身体の再生の実感を経て辿りついた「生命の尊さ」と未来への「希望」が凝縮しているのではないか。このような彼女の精神の成長を支えたのは、母方の縁者を中心に幼少時より親しんできた、「連帯」の力で社会変革を成し遂げようとする思想であったことは言

うまでもない。後に制作された映画やコミックでは登場人物のそれぞれの造形が削り落とされると同時に、この最後の場面も省略されている。しかし、この場面こそ、この物語のすべてを凝縮する最も重要な場面なのである。

以上、『みえない雲』の表現に即して、その作品世界を検証してきた。この作品がドイツの脱原発政策を推進する下地を作る一助となったと考えられていることを先に紹介した。そのドイツでの『みえない雲』の受容の内実については、別稿にて再検証したいと考えている。

【Ⅶ】終わりに

ドイツの脱原発政策と日本

最後に、現在のドイツの脱原発政策と日本の状況についてふれておきたい。脱原発というドイツの方向性が決定的になったのは、福島第一原発事故後のことである。福島原発事故から11日後、メルケル首相は「安全なエネルギー供給のための倫理委員会」を招集し¹³、議論を尽くし2か月以内の提言を指示した。なぜ「倫理委員会」かと言えば、原発から派生する問題は社会、家族、一人一人の生活の全てに関わるものであり、技術や経済的側面だけでなく、倫理・文化・価値観からの政策判断も必要である、という理由による。原発使用は、安全技術だけではなく、稼働に当然伴うリスクにどう向き合うか、という観点が必要ということなのだ。それが原子力の安全性を技術的な側面から点検する委員会とは別に、倫理委員会を設立した理由である。ここから、原発稼働の可否は、原子力の技術専門家ではなく、社会が決めるというドイツの姿勢を読み取ることができるだろう。

4月末に行われた公開討論は11時間に及び、産業衰退や電気料金高騰への危惧、つまり、経済に配慮して稼働を延長すべきか、早急に原発を廃止すべきか、について議論された。そして、最終的な倫理委員会の結論は、何よりも優先すべきは未来の世代に対する責任である、ということだった。倫理委員会委員長マティアス・クライナー博士は次のように述べている。

私はひとりの父親として自問自答しました。
大量の廃棄物を生み、巨大事故のリスクをか
かえた技術を利用してよいのだろうか？

負の遺産を未来の世代に押し付けることが本
当に許されるだろうか？

原発の是非は単なる経済の是非ではなく、倫
理の問題として考えるべき課題なのです¹⁴。

こうして、2011年7月8日、ドイツの脱原発法が
成立し、17基の原発中、停止の8基は廃炉、9基
は2022年までに段階的に廃止し、再生可能エネル
ギーへの転換を目指すことが決まった。

このようなドイツの方向性には、まず、ドイツ
連邦共和国基本法第1条第1項に掲げられた「人
間の尊厳は不可侵である。これを尊重し、および
保護することは、すべての国家権力の義務である」
という人間の尊厳を絶対的に尊重する姿勢が大き
く関わっていると考えられる。

また、東西冷戦時代、西ドイツの反原発・環境
保護運動に影響を与えたと言われる著作がある。ま
ず、1976年にドイツ語版が刊行された、エーリッ
ヒ・フロム（Erich Seligmann Fromm）の *Haben
oder Sein*, (『生きるということ』)¹⁵、そして、翌
1977年のロベルト・ユンク（Jungk, Robert）の
Der Atom-Staat (『原子力帝国』)¹⁶である。前者は、
物質や知識・権力の所有に囚われるのではなく、
人間が人間らしく生きることを新しい社会の精神
的基礎に据えることを訴えている。また、後者は、
原子力の開発を「非人間性への進歩」ととらえ、
「つつましき、公平、自然との結びつき、美しいも
のへの愛、感情の肯定、参加、想像力の解放」を
促す内容である。

こうした人間の尊厳と生き方、原子力に対する
真摯なまなざしが根底にあり、『みえない雲』が生
まれ、福島原発事故を機に、ドイツの人々は脱原
発に完全に舵を切ったのである。

一方、事故から3年経っても福島原発事故の処
理は進まず、未だに仮設住宅に住む避難民が存在
し、仮設住宅の土地が借地のために返却期日が迫
り、入居者が新たな仮設住宅に移らざるを得ない
状況が新たに起きている。ドイツと日本の「違い」
を知らされるばかりだが、一縷の光明を見た想い
がしたのは2014年5月21日、大飯原発訴訟の3、

4号機運転差し止めを命じた福井地裁の判決であ
る。要旨の一部を抜粋した¹⁷。

【求められる安全性】原発の稼働は法的には電
気を生み出す一手段である経済活動の自由に
属し、憲法上は人格権¹⁸の中核部分よりも劣
位に置かれるべきだ。自然災害や戦争以外で、
この根源的な権利が極めて広範に奪われる事
態を招く可能性があるのは、原発事故以外に
想定しにくい。具体的危険性が万が一でもあ
れば、差し止めが認められるのは当然だ。

【原発の特性】原発技術で発生するエネルギー
は極めて膨大で、運転停止後も電気と水で原
子炉の冷却を継続しなければならない。その
間、何時間か電源が失われるだけで事故につ
ながり、事故は時の経過に従って拡大する。
これは原発に内在する本質的な危険である。

【国富の喪失】被告は原発稼働が電力供給の安
定性、コストの低減につながると主張するが、
多数の人の生存そのものに関わる権利と電気
代の高い低いという問題を並べて論じるよう
な議論に加わり、議論の可否を判断すること
自体、法的には許されない。多額の貿易赤字
が出るとしても、豊かな国土に国民が根を下
ろして生活していることが国富であり、これ
を取り戻すことができなくなることが国富の
喪失だ。（下線部は論者）

この判決が有効なものとなるかどうかはまだこれ
からの問題であるが、ドイツと同じく、経済第一
主義ではなく、人間が人間らしく生きることをす
べての根幹に置き、最も重要なものとする認識が、
日本にも醸成されてきたことを示している。今後
の判決の行方に注目していきたい。

注

¹ 1986年4月26日午前1時23分、旧ソ連（現在のウクラ
イナ共和国）のチェルノブイリ原子力発電所で起きた
事故。第4発電ブロックで非常用の電源テスト中、核暴
走事故が起き、2度の爆発と火災が発生した。テスト従
事者の規則違反やチェルノブイリ型RBMK原発の制御
棒の設計自体の欠陥などが原因として挙げられている。
事故によって環境中に放出された放射性物質はヨーロッ
パ諸国を始めとして北半球のほぼ全域に達した。事故

直後の急性放射線障害による死亡者の他に、炉の冷却や密閉などの事故処理のために約80万人が動員され、多くの被曝者を生み、がんや心臓病などで多数が亡くなっている。また、90年ごろより、この事故が原因とみられるウクライナ、ベラルーシの子どもたちの甲状腺がんの急増も報告されている。原発から半径30kmは放射能汚染危険地域として強制移住地域となり、135,000人が避難し、現在も居住が禁じられている。また、200km以上離れた地域にも局所的高濃度地域が点在している。

- ² 『国際文化表現研究』第10号（国際文化表現学会、2014年3月31日）p.241-258
- ³ 1928年、チェコ生まれ。戦後、西ドイツへ移住し、チリ、ベネズエラなどのドイツ人学校で教鞭をとった後、72年以降、西ドイツ・ヘッセン州で小学校教師を続ける傍ら作家活動を行った。社会が生み出すさまざまな現実、例えば、アウトサイダー、亡命者、外国人労働者、平和や環境問題などをテーマに執筆。「核」については、核戦争後の生活を描いた『最後の子どもたち』（1983年）がある。
- ⁴ 小学館文庫『みえない雲』（2012年）「解説」
- ⁵ グレゴール・シュニツラー監督。少女・ハンナとエルマーの恋を軸に、人々が原発事故によりパニックに陥る場面を中心に制作された映画。
- ⁶ アニケ・ハーゲによるコミック。日本では、2011年に『コミック みえない雲』として日本語訳が刊行された。
- ⁷ 本論では、小学館文庫『みえない雲』2011年6月20日をテキストとして用いる。引用部分の末尾にはテキストのページ数を記した。
- ⁸ 放射性物質漏洩による大惨事のこと。
- ⁹ 1997年に全文が発表された、チェルノブイリ原発事故を巡る証言集。事故そのものの再現ではなく、事故を通して人々が何を見、覚醒したのか、人々の精神の軌跡を追う。
- ¹⁰ チェルノブイリ原発事故後、母が作り、デモの横断幕に書いた詩。「チェルノブイリがこわいのだあれ？／ミリレム、ベクレル、なんのこと？／早く死ぬのは子どもたち／空からさすのは放射能／あなたの番はいつかしら？」
- ¹¹ 「緑の党」のこと。1970年代から世界各地で起こった、エコロジー、反原発、反核、反戦、脱物質主義、多文化主義、参加型民主主義、フェミニズムなどをテーマにした新しい社会運動。西ドイツでは、1980年に「緑の人々」が結成された。
- ¹² その他にも「これは政治家だけの問題じゃない。私たちだって文句は言えないと思うの。だって民主主義の社会なんだから、政治家を選んだ私たちの責任だってあるわ」とある。このような部分も、父方の祖母や叔母の嫌う政治の世界に関心を持ち、積極的に参加すべきであるという、作者のメッセージが感じられる。
- ¹³ 「倫理委員会」のメンバーは、政治家、学識者、カトリック・プロテスタントのリーダーなど17名で構成された。

¹⁴ 『みえない雲』（コミック）「解説」高田ゆみ子（2011年10月、小学館文庫）p.188-189

¹⁵ ドイツの社会心理学、精神分析、哲学研究者（1900年1980年）。日本では、1977年、佐野哲郎訳で紀伊国屋書店より刊行された。

¹⁶ ドイツ出身のジャーナリスト（1913-1994年）。日本では山口祐弘訳、1981年、アンヴィエル刊。ロベルト・ユンクは、1957年初来日。広島と被爆状況をヨーロッパに伝え、ドイツ、オーストリアで反核運動に尽力した。『廃墟の光一甦るヒロシマ』（原田義人訳、1961年、文芸春秋社）など。

¹⁷ 「日本経済新聞」電子版2014.5.22

¹⁸ 「人格権」とは、「人の生命・身体・自由・名誉・氏名・肖像・貞操・信用など、権利者から分離することのできない利益で、私人の権利に属するとされるもの」（『大辞泉』小学館、2013年4月）